もらった花ともらいそこねた心

土橋光子

梅、桃、杏とほとんど一斉に花開く信州、桜がすぐおいかけてくる、私の初めての現場は上田市にある梅花幼稚園、カナダミッションによって創立された古い伝統のある幼稚園で母校の発祥の地でもあった。

春、入園、進級、心も体も弾んで踊っているなかへ、新米教師として、これも喜んで迎え入れられた様である。信州弁で声をかけてくる子どもたちと挨拶をかわしながら遊びの時が流れていた。担任は年中組、そろそろ片付けの頃おっとりしたN子が両手をふっくら合せニコニコと庭から帰って来た。「せんせ、あげよ」と抑揚をつけ、はしゃいだ声をひびかせて駆けよって来る。「ありがとう、なあに」彼女の声にあわせて両手をさしだす。可愛い両手が重ねられゆっくりと開かれてゆく。

好奇心の強い私はこの心を瞳にこめてN子の手を見つめる。そこに見たものは何だったろう。まだ緑色をかすかに残しやっと黄が濃くなりはじめた花びらを閉じ花茎をわずか三糎ほど残しただけのラッパ水仙の蕾が……

私は息を呑んで棒立ちになった。手の平はこわばり口は渇く、ようやく小さな声で話しかけた、「Nちゃん、これどこでつんだの」「あのね、えんちょうせんせのおにわよ!」「えっ!」見あげてくるN子の眼はパッチリと澄んでいて美しい。声を呑みこんでしまった私の顔を不思議そうに見つめている。その時のN子と私の顔を御想像ください。小天使と自分の心を取り落して、どこに落したかとウロウロしている人間、この二人の対照的な存在。困った、どうしよう何と報告したら……私は決心してN子と手をつないで園長ミス・クックのもとへ、「すみません」後は何を言ったか覚えない「オーッ」と大きく見開かれた眼がすぐやわらかくやさしい眼なざしに変り、「Nち

ゃん、もう少しおくびながくね！　これお水のむのたいへんよ！」と、手はやさしくO子の頭に、もう片方の手はそっと私の背中をなでている。N子にとも私へともなく二人にであろう……

「お水の道が切れるとお花、のど乾くのね、それは可愛想ですね、早くお水あげましょう」　N子の手を引いて保育室にもどった二人は、小さなお皿に水を汲み水仙の花をつける、花は三日程してはなびらをひろげていった。

✠　✠　✠

とまどいとは何なのか？　卒業の時、恩師は新任地にゆく時、家族に送っていってもらわない様にとそんなことまで言って下さった。それにもかかわらず末娘の私を一人旅立ちさせるのに堪え難く母は送って来た。春雨のけむる上田駅にミス・クックのレインコート姿を見出して母は驚いた。その母以上に驚いたらしい園長は二人の姿を交互に見つめながら、「お！　大事な大事な娘ね！」「大切にしましょ！」と自分の雨傘をそっとさしかけスーツケースを持って下さり、先輩の宿舎へ送りとどけて懇に頼んで母にも泊ってゆくようにと言って下さった。母は自分の未熟な娘を安心して託すことの出来る方を発見し、どうしてみようもない思いを拭い去ってもらったらしく、その夜の遅い汽車で甲府へ帰っていった。

さてこの新米教師にあったN子は心から歓迎し、喜びを分け合うために彼女が一番美しいと思って水仙の蕾を摘んで来てくれたのに、N子の心を知る前に先ず自分自身の心の中の葛藤と向いあってしまったのである。「ありがとう」と言った時にはたしかに彼女の心を受けとめていた筈であった。贈物の中身を見た時、困ってしまい澄んだ瞳から何物も受け取り得なくなってしまった。あの時水仙の花よりも先ず第一番にN子の心をしっかり把握していたら二人ともどんなに幸せな事だったろう。そしてその後の事も二人で考えあえたと思う。或る男子が手一杯の毛虫をプレゼントしてくれたこともある。何故この様なものをと云う気持ちが先にたって、彼等の大好きな虫を親愛の情をこめて贈ってくれたのに……

私は今も時折、背にあの暖かい手を感じることがある。大人には思いつも及ばない奇想天外な子どもたちの思いつき、ほんのちょっとした仕草に出あうと、十九歳で就職し一人立ちした時に私を愛して受け入れて下さった恩師や先輩、親しさをこめて付き合ってくれた子どもたちやお母様方を思う。未だに悩みとまどう時、あの様に受け取り、それから考えたら、真のことが、解決の道が必ずあると教えつづけてくれている。

（神奈川・横浜学園附属元町幼稚園）